

岩手・志羅山遺跡

1 所在地 岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山

2 調査期間 第九四次調査 二〇〇六年(平18)四月～六月

3 発掘機関 平泉町教育委員会

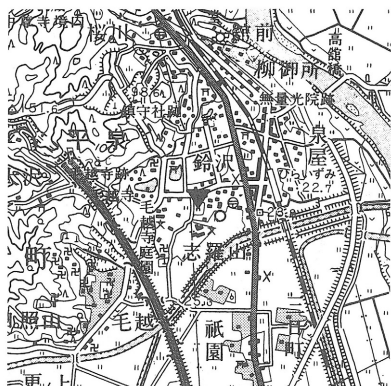
4 調査担当者 鈴木江利子・島原弘征

5 遺跡の種類 屋敷跡

6 遺跡の年代 一二世紀、中世・近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

志羅山遺跡はJR平泉駅西側に位置し、五〇〇m四方の広がりをもつ。現在は町役場や郵便局、銀行などの施設を有する市街地であり、駅から七〇〇m西にある特別史跡毛越寺に向かう県道が遺跡を横断している。近年、この県道の拡幅に伴う発掘調査や、住宅建設などに伴う調査の結果、一二世紀奥州藤原氏時代の遺構・遺物のほか、中世や近世の資料も増えている。



(一 関)

今回の調査区は志羅山遺跡の南西端に位置する。調査前は水田として使用され、平坦であるが調査区外北側の水田は一段高い広がりとなっている。調査面積は八五〇㎡。検出遺構は掘立柱建物・土坑・溝などで、遺構の年代は、一二世紀、中世、近世である。










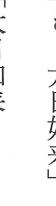

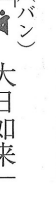


木簡(笹塔婆)は、調査区北部で検出した東西方向の溝の埋土中の位の広い範囲から、計二点出土した。溝の検出長は二五mで、東西の調査区外に続いている。幅は約二・〇m、深さは一・〇～一・三m、断面形はV字状を呈する。溝底は東にわずかに傾いており、笹塔婆出土層は砂を含む流水の痕跡を示す。

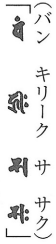



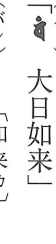
笹塔婆の年代は、その形状や大きさ、梵字「𑖀𑖃𑖅」(バン)と「大日如来」が同時に書かれていること、共伴遺物の年代などから、一三世紀から一四世紀にかけてと考えられる。溝からの共伴遺物には、かわらけ、陶器、磁器、木製品、板碑などがある。

なお、調査区の北七〇mの水田の傍には、元応三年(一三二二)の紀年銘をもつ板碑が立っている。また、「大日如来」の笹塔婆としては、福島県荒井猫田遺跡出土のものに多数の類似がある(本誌第二一・二三・二六号)。

8 木簡の釈文・内容

- (1) [バン] 大日如来 (271)×24×2 061
- (2) [バン] 大日如来 (265)×24×3 061

(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)
													
331×22×2 061	(264)×24×2 061	326×25×3 061	(259)×26×4 061	(269)×27×2 061	329×18×2 061	324×22×2 061	(292)×23×5 061	(270)×22×3 061	318×28×3 061	319×28×2 061	288×25×4 061	319×28×2 061	283×19×6 061

(21)	(20)	(19)	(18)	(17)
				
286×27×2 061	289×20×3 061	325×21×2 061	322×30×3 061	304×25×3 061

いずれもスギ材で、頭部を山形に加工し下端を細く尖らせる形状も類似する。(2)(13)は破損により頭部の原形は不明。(1)(2)(8)(9)(12)(13)(15)は、下端部が僅かに破損している。(10)(21)の下端は、破損した痕跡がないことから、元々尖らせていなかったとみられる。文字はほとんどが梵字「𑖀」(バン)と「大日如来」のセットで、判読が困難であつても推定が容易である。このうち、(3)(9)(21)は例外である。(3)は文字の半分が削られているが、「南无大日如来」と判読できる。(9)は墨書らしい痕跡を示すが判読に至らない。他より厚みがあり、面取りされた様子からは、用途が違う可能性もある。(21)は他と異なり梵字だけが四文字書かれている。(16)(18)は文字が不鮮明であるが、他と同じ墨書であろう。また、(6)(7)(21)の裏面には、シミか墨痕かわからない痕跡が認められる。(20)は近接地から出土した二片が接合した。

(鈴木江利子)

